

「ベオウルフ」の写本は大英博物館に一部しか現存しない。それをもとに判読したり修正してテキストを作り上げるのが私の写本批評の目的です。しかしその写本は十八世紀に大火に会い、ひどく損傷を受けたので非常にむずかしいテキストの判読の問題があるわけです。

そこで大火に会う前にデンマーク人のソールケリンが自分自身と雇った写学生で二種の復写を試み、後生に残したものがありますが、これをもとに、判読出来なかった部分或は従来の本文批評家たちが見落したり、無視したりした箇所を自分の目で確かめ、自分の力で修正してみようとするのが私の仕事です。

このような仕事には高度な知識や才能が要求されます。古典英語を読みこなす力はもちろんのこと、アングロ・サクソン時代の歴史的背景、他のヨーロッパの国々との文化的交流或はその当時「ベオウルフ」の作者（不明であるが）がどの様な写本を読み、影響を受けていたかを推測しなければなりません。しかもこれらは科学的例証を

ともなわなければなりません。それに加えて、大変やっかいなことに芸術作品としての「ベオウルフ」を価値評価出来る才能がないと写本批評の仕事は死んでしまいます。私にとってこの仕事が適格かどうかは遠い未来において裁かれるであろうが、私と

私の研究



「ベオウルフ」の 写本批評

大場啓蔵

してはこれまで「ベオウルフ」の写本批評に誰も応用したことのない方法をやってみようと考えています。それは「ハムレット」の作者がこの作品を作り上げた時の創作態度と「ベオウルフ」の作者のそれにかなり
の共通性を見出し、そこから何らかのヒン

トを得るというのが一つの方法で、もう一つはシェイクスピアの全作品にいろいろな異テキストがあるわけだが、はたしてどのテキストが、又どの語句がシェイクスピアのものかを判断する本文批評を「ベオウルフ」に適用してみるという方法です。「ベオウルフ」の本格的研究は未だ百年くらいの歴史なのでこれからもっとすすんだ研究が現われる可能性を持っています。

ただわれわれ本文批評にたずさわる者が最も注意しなければならないことは、自分というはしたない人間のほとんど価値のない好みをも本文批評にもちこんだりしては決してならないということです。過去においてシェイクスピアの悲劇作品が歪められたり、ミルトンの作品がベントレーという古典学者によって改悪されたりしたことを想い出せばそのことがわかるでしょう。「ベオウルフ」研究は他人が軽蔑して言えば天上の学問といえるかも知れません。それは実用的でないし、女心をくすぐるような箇所はこれっぽっちもないからです。

（女子大学助教授・英文学）